＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
GCOE NewsLetter
[No.15　2008/12/22]

2008年度第2回gCOE論文賞の応募について
次回のオープンレクチャーについて
ジャック・ダララン博士gCOE講演会聴講記
戸田聡博士gCOE講演会の要約
第13回オープンレクチャーの要約
第14回オープンレクチャーの要約
gCOEスタッフ海外出張報告
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ 2008年度第2回gCOE論文賞の応募について

2008年度第2回gCOE論文賞の応募期間は来年2月19日～2月27日です。
詳細については来年1月半ばに発表する予定です。NewsLetterでもお知らせします。

■ 次回のオープンレクチャーについて

2009年1月14日（水）18:00～　名古屋国際センタービル15F　GCOEオフィス
講演者：高橋 亨（文学研究科教授・日本文学）
題目：「源氏物語と後宮文化」

■ ジャック・ダララン博士gCOE講演会聴講記

小澤 実（gCOE研究教育員・西洋史学）

・グローバルCOE講演会：「アッシジの聖フランチェスコと聖クララの関係に見る男／女関係」（11月27日14時30分～16時　文学研究科大会議室）

ひと月にわたるダララン氏のグローバルCOEプログラムでの講演・講義の最後となる本講演では、これまでのように映像資料は用いず、準備されたテクストに解説を加えるかたちですすめられた。

ダララン氏の研究経歴から明らかなように、彼は中世霊性テクストのテクスト学的研究を専門にすると同時に、修道世界におけるジェンダーやセクシュアリティの問題に深い関心を寄せている。通俗的な理解では女人禁制の世界と想像されがちである修道世界においても、女性の果たす役割やジェンダーイメージの理解が極めて重要であったことが最近とみに明らかとされつつある。その牽引者となっているのが、衝撃作『母としてのキリスト』の著者であるプリンストン高等研究院教授キャロライン・バイナムである。ダララン氏の研究も、バイナムのそれに多くを負っていることは言を俟たない。

本日の講演では、アッシジのフランチェスコとクララという二人のフランシスコ修道会創設メンバーにまつわる文献史料を精査し、それぞれが異性に抱いていたイメージを記した箇所、さらには、それぞれが異性として表象された箇所の分析を試みた。知識の乏しい私にはいささか難解な議論ではあったが、ダララン氏の理解に通底する一点のみを強調しておきた

い。それは、中世テクストに見られるジェンダー・セクシュアリティ表象は、必ずしも現実世界のそれを反映しているわけではなく、聖書テクスト、騎士イデオロギー、宮廷文化といった、ある特定の価値体系に見られる人間関係や性差に基づいていたという点である。こうした構造主義的理解に従うならば、修道テクストだけではなく、中世文学も含めた西洋中世世界のテクストのいずれも、そうした価値体系の理解なくしては、正確に情報を汲み取ることが不可能となる。そういった点では、極めて射程の広い議論であったように思われる。
　ダララン氏の一連の講演と講義は、西洋中世のテクストに基づいてはいるが、すべての時代と地域の歴史テクストに応用可能な解読技術の披露であった。名古屋大学グローバルCOEのために原稿を準備し熱意ある教育をほどこしてくれたダララン氏には、感謝の意を表したい。

■ 戸田聡博士gCOE講演会の要約

「カイサリアのエウセビオスとシリア語キリスト教文学」（12月18日14時40分～16時30分 文学研究科大会議室）

戸田　聡（一橋大学非常勤講師　古代キリスト教史、東方キリスト教文学）

　古代末期、東方キリスト教圏の各地では、キリスト教の伝播に伴って現地語が文学言語化を遂げた。その際の重要な推進力として、各現地語への聖書の翻訳が挙げられる。
　それら現地語文学の中で最も古くから存在するのはシリア語文学である。元来メソポタミアの都市エデッサを中心として使われた言語であるシリア語は、次第に広範囲で用いられるようになり、三世紀から十三世紀さらにそれ以降に至るまで、シリア語キリスト教文学は（翻訳もオリジナルの著作も含めて）多くの作品を生み出した。
　古代キリスト教史研究との関連では、特にシリア語キリスト教文学の最古の段階が重要であり、それに属する作品として『トマスによる福音書』『ソロモンの頌歌』などが挙げられるが、これら著作については、その著作原語がギリシア語かシリア語かをめぐって学者の間で決着がついていない。しかもエデッサという町が、早い時代からギリシア語とシリア語の両方がともに通用する、文化的多様性を許容する地域だったと理解されているため、研究の現状では、単に言語的な説明から著作原語の決定を図ることは困難な状況にある。そこで本講演では、『教会史』の著者であり、かつシリア語キリスト教文学に多大な関心を寄せていたカイサリアのエウセビオスの証言を基に、同じく著作原語の問題が年来議論されてきたタティアノスの『ディアテッサロン』について、問題の再考を試みた。

■ 第13回オープンレクチャーの要約

2008年11月12日（水）18時～19時30分　名古屋国際センタービル15F　GCOEオフィス
講演者：イヴァン・ルクレール（フランス・ルアン大学教授）
題目：「なぜ私たちはみなフローベール研究者なのか？」

フローベール研究の第一人者イヴァン・ルクレール教授（ルアン大学）の講演は、必ずしもフローベール研究者ではない者も含めて、私たちが多かれ少なかれフローベール的なものを持っていることを明快に説かれた。フローベールは、経済的に恵まれていたこともあって、ジャーナリズムとは無関係に、もっぱら書くという営みに専念することができた。彼は写真や自伝を拒み、メディアには登場しようとはしなかったが、これは作家は自分の考えを作品のなかで直接語るべきではないとする彼の「没人称」の美学とも深く関わっている。「クロ

ワッセの隠者」と呼ばれたように社会とつねに距離を保っていたフローベールは、逆説的だが、つねに読者の同時代人であり続けてきた。19世紀にはロマン主義、自然主義、象徴主義などの流派と関連づけられ、20世紀に入ってからは、プルーストやサルトルによって注目され、あるいはヌーヴォー・ロマンの先駆者と見なされるに至った。とりわけインターネットの時代になってからは、フローベールの厖大な量の草稿の、加筆や削除を復元した生成批評版の公刊が電子テクストによって可能となり、ルアン大学のフローベールセンターのサイト上では『ボヴァリー夫人』の全草稿の生成批評版が公開されている。こうしてフローベールは21世紀においても私たちの同時代人であり続けている。その意味では、私たちは意図せずしてすでにフローベール的なのではないだろうか。
　東京方面からもフローベール研究者が何人も駆けつけ、熱気に包まれた講演会となったことを書き添えておきたい。

[文責：松澤和宏（gCOE研究担当サブリーダー／フランス文学）]

■ 第14回オープンレクチャーの要約

2008年12月10日(水）18時〜19時　名古屋国際センター15F gCOEオフィス
講演者：長尾伸一（経済学研究科教授）
題目：「啓蒙時代の自然と人間 – 「科学革命」と宗教のかかわりをめぐって」

かつて18世紀の啓蒙時代は、科学的な思考に基づいた「理性の時代」であり、現代人の考え方の基礎をつくった原点とされてきた。とくに17世紀科学革命の集成とも言えるニュートン体系は、啓蒙の科学の中心として、思想的に絶大な影響を与えてきたといわれてきた。
　ニュートン主義は真空中を動く粒子の表象と機械論によって、啓蒙の基礎となる合理化された科学的世界像を提供し、それによって近代的人間観を生み出したと考えられてきたが、その自然科学以外の知の領域での展開は、ニュートン主義による世界の数学化、内在化、合理化、経験化などを指摘した、M.ホルクハイマー、T.W.アドルノの『啓蒙の弁証法』、E.カッシーラーの『啓蒙の哲学』、P・ゲイの『自由の科学』などの射程に基づいていた。だが1970年代以後、M.C.ジェイコブやS.シェイピンらエディンバラ学派などによって科学革命の見直しが進み、それまでの近代像とは異なった科学と宗教や政治の結合が指摘されてきた。また国際18世紀学会などで進む啓蒙研究の精緻化は、非西欧世界を含め、啓蒙の全体像をより多様性に富んだ形で示しつつある。これまで社会科学生誕の地の一つである18世紀スコットランドを中心にイギリス・ニュートン主義を研究し、『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』、『トマス・リード』などで、自然と道徳世界を包括する観念複合体としてニュートン主義を描いた。ニュートン体系は宇宙の恒常的な秩序を論証するとともに、神の作用因としての積極的なそれへの介入を主張し、イギリス独特の神観念と経験論哲学、科学方法論の共存を可能にした。それによってニュートン主義はキリスト教的な枠組みの中で道徳を科学的に研究することを可能にしたのである。
　本講義では以上の点を、ニュートン体系の根幹である１万有引力の法則および２地動説について、実例を挙げて検討した。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

「台湾・清華大学訪問」

台湾国立清華大学からの訪問団が今年7月にグローバルCOE拠点に来訪し懇談の機会を持っ

たことは，GCOE NEWSLETTER No.3にてお伝えした通りです．それ以降も継続的に，同大学の人文社会学院と本学文学研究科との学術交流について，グローバルCOEプログラムを中心に話し合いを重ねてきました．11月に入ってからは人文社会学院を訪問するための日程調整を行い，佐藤彰一教授（拠点リーダー），釘貫亨教授（教育担当サブリーダー），重見晋也准教授（技術統括責任者）の3名からなる訪問団が2008年12月4日から6日までの日程で人文社会学院を訪れ，今後の学術交流協定について協議を行うと共に親交を深めました．
訪問初日には，清華大学国際交流担当理事である王偉中教授による歓迎レセプションが開催され，人文社会学院院長である張維安教授のほか6名の教員が参加する中，5ヶ月ぶりの再会を喜び合いました．翌日は王教授から大学の紹介を受けた後，人文社会学院の張旺山副教授および黄文宏副教授から大学における人文社会学院の位置づけや教育システムについて説明があり，名古屋大学の教育体制についても改めて説明し意見交換を行いました．この会談の中で，研究大学としての質を確保するためにも継続的な国際交流活動が重要であることを参加者全員で確認しました．
その後，中央図書館館長兼全学教養教育責任者である謝小芩教授から図書館の案内を受け，昼食会では教養教育や蔵書の整備体制について意見を交換しました．
午後からは人文社会学院に場所を移し，今回の訪問の目的であった博士後期課程の学生を中心とした交流協定について協議すると共に，グローバルCOEの取り組みについての紹介を行いました．人文社会学院からは，前述の3名に加えて，李貞徳教授（歴史研究所所長），張月琴教授（言語学研究所所長），陳祥水教授，于治中副教授，王惠珍助理教授，鐘月岑助理教授が参加し活発に議論を交わしました．議題は，博士後期課程の教育課程制度から個々の専門分野における研究の現状にいたるまで多岐にわたりましたが，参加者一同早期に両機関で学術交流協定を締結し，継続的な学術交流を推進することで意見が一致しました．
会議後に案内された人文社会学院付属の図書館では、その蔵書の充実ぶりに我々３名は圧倒されました．特に同図書館には清朝期に出されたすべての四庫全書が収められており，学生交流が実現することで名古屋大学の学生にも大きな恩恵がもたらされると確信しまし た．
2泊3日と大変短い訪問ではあったものの，清華大学における人文学研究の質の高さを再確認し，現在協議中の学術交流協定の締結にも弾みをつけることができた点で，大変充実した訪問でした．

次回のメール版NewsLetterの発行は2009年1月中旬 を予定しています。

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.15
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行
Copyright(C) 2008 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS